

支部だより

シンガポール外語会

福田圭馬 (C平10)

4月17日(金)、雨季も終わりに差し掛かったシンガポールにて2009年初めての外語会を日本料理 Zen にて、新規入会の鹿間千尋さん(F昭50)、菊池卓郎さん(E平1)、永沢良枝さん(S平13)、加藤千映子さん(E平14)をお迎えし、計20名にて開催致しました。在星16年の大先輩から在外公館で研修中の休学中の現役生まで、年齢層も業種もまったくばらばらではありましたが、後藤会長から亀山学長とのお話や、皆さまからシンガポールの生活、次回大学対抗ゴルフの作戦などなど各所で話に花が咲いておりました。

今回をもちまして幹事が山田恵梨子さん(In平14)から大下さん(A平16)に交代となりました。山田さん1年間ご苦労さまでした。

tokyogaigokai_sin@hotmail.com

2009年度外語会関西支部総会

鳥山 稔(S昭43)

4月25日(土)、ラマダホテル大阪において、2009年度関西支部総会が開かれました。来賓として亀山学長、上原外語会理事長、藪下理事、大阪外語(現大阪大学)咲耶会の池田会長他2名の方々にご出席いただき、また中部支部から2名、東京から1名と遠来の方々も駆けつけていただきました。総参加者数は66名と、昨年度の76人からはやや減りましたが、参加者一同有意義な楽しい時間を過ごしました。

まず、関西支部総会には初めてのご出席となる、昨年外語会理事長に就任された上原尚剛氏から挨拶があり、一般社団法人登記のための委任状問題についてはほぼ目途が立ったこと、会費問題については、特に若手会員を増やして行くための取り組みなどについての説明がありました。

亀山学長からは、大学院の改組、大学間連携、

異文化交流等、いくつかの重点プロジェクトについての現状と将来構想についての説明があり、特に今年の重点事業として異文化交流施設の建設を挙げられました。学長のお話からは、外語を経営的に強固なものにしつつ、国際的拠点化を図ってゆくという強い意志と熱意を、参加者一同感じることが出来ました。その他、国際教育支援基金への協力感謝、外語出版会発足などについても触れられました。

咲耶会の池田会長からは、咲耶会は大阪大学外国語学部同窓会として存続しながら、大阪大学同窓会連合の一員でもあるという新しい環境の下で、会の円滑な運営に努力されているとのお話がありました。

この後、恒例の特別講師による講演に移り、「紛争を生きる人々 — 東チモールから学んだこと」というテーマで、大阪大学大学院国際公共政策研究科教授の松野明久氏(In昭55)が講演されました。

400年にもわたってポルトガルの植民地支配を受けた東チモールでは、1974年のポルトガルの左派革命を期に独立機運が高まり、75年に左派勢力(Fretelin)によって独立が宣言されたものの、インドネシアのスハルト反共政権によって併合され、当時のアメリカは反共の立場からこれに同意。その後24年間にわたり統合派、保守派、左派革命派の間で20万人の死者を出す想像を絶する暴力の応酬があり、98年スハルト政権が倒れると、99年に独立の是非を問う住民投票が実施され、ようやく2002年5月に独立が達成されたという歴史が語られ、同じアジアにありながら日本人にはなじみの薄い東チモールという国について、大いに認識を深めることが出来ました。1時間という時間があっという間に過ぎてしまったように感じたのは、先生の軽妙な語り口もさることながら、長期間にわたり国連の選挙管理官や受容真実和解委員会アドバイザーとして自ら現地に飛び込み、身の危険を感じるほどの緊張感の下で、実践体験をした人で

しか語れないものが随所にあつたからでしょう。講演の最後に言われた、「国際政治にかかわるには理論だけではなく実践が必要、知識だけではなく方法を学ぶこと。外国語は出来て欲しいがそれだけではだめ、政治的バランス感覚と確立した自己が必要」との言葉が印象的でした。現役の学生にもぜひ聞いて欲しい講演でした。

総会の後の懇親会は、岩田邦郎氏(Po 昭 22)の詩吟「九段の桜」で始まり、柴田和彦氏(IP 昭 23)による乾杯の発声のあと、メインイベントへと移りました。例年行なわれていた音楽などの余興でなく趣向を変えて、主に遠来の方々や、幹事の独断と偏見で指名した方々にインタビューをするという試みでした。海外での遺跡発掘のために現地へ何度も足を運んでいる方、プロ野球球団の運営に関わっている方など、思わぬところで活躍されている方も多く興味深い話を聞く良い機会となりました。今回は紅一点の幹事安井紀子さん(S 昭 53)による中締めもあり、終始和やかな雰囲気の中、会を終えました。



氏はトヨタ自動車のベルリンの責任者、長谷川洋一氏(D 昭 56)。10人ほどのメンバーのほとんどはドイツ人と結婚している女性で、日本語教師の武田由美子さん(D 昭 47)などドイツ語科卒業生が多いが、最近ではドイツ以外の外国に留学中にドイツ人男性と知り合って結婚、ベルリンで暮らすようになったというケースがふえている。日本語教師の城戸寿美子さん(Po 平 1)、子育てをしながらフンボルト大学で勉強中の今掛美保さん(C 平 7)、ベルリン自由大学で東ヨーロッパの研究を続けることになった横山愛さん(R 平 20)。ドイツ語科以外の人が加わることによって会話の幅が広がるのはとても楽しい。留学生の三宅洋子さん(院D 平 10)はポツダム大学でドイツ語学を、金子沙織さん(D 平 13)はベルリン自由大学で比較文学を勉強中。

最後は幹事交代のお知らせ。2000年にケルンからベルリンに移ってきてベルリン支部を立ち上げ、以来幹事をつとめてきた私だが、このほど幹事を植原久美子さん(D 昭 61)に引き継いでいただくことにした。植原さんは3人の子供のお母さんで翻訳家、夫君のラインハルト・ツェルナー氏はボン大学、日本・韓国学研究専攻教授。ツェルナー教授の最新の著書『東アジアの歴史、その構築』の日本語訳も担当。植原さんが企画した初めての外語会が5月22日我が家の近くのカンボジアレストランで開かれた。参加者は珍しく多い7人！急な出張で欠席となった長谷川氏に代わってたまたまベルリンを訪問中だった古川信孝氏(D 昭 32)が飛び入り参加、初参加の2人を含め年代の差を飛び越えて大変楽しい会になった。

東京外語会ベルリン支部だより

永井潤子(D 昭 33)

2009年のドイツは、ベルリンの壁崩壊20周年、ドイツ連邦共和国建国60周年、第2次世界大戦勃発70周年など、さまざまな節目の年にあたり、ベルリンではこうした歴史的な出来事を記念する展示やさまざまな催し物が1年間にわたって行われている。ますます人気の高まる統一ドイツの首都ベルリンには世界各地から若い芸術家などが集まってきているが、そういう動きとはまったく関係ないのがわが外語会ベルリン支部で、相変わらずのミニ支部である。朗報と言えば全員女性の会員に久しぶりに男性が加わったことだろうか。「お花畑の中の1本の麦」



左から、横山、城戸、永井、三宅、金子、植原、古川

パリ支部

沼田睦子 (F 昭 44)

2001 年秋、恩師故田島宏先生が府中新キャンパスへの移転統合と本郷サテライトオープンという二大慶事の報告を携えて訪仏されたのを機に休眠状態だったパリ外語会が再興され、その後は一年も欠かすことなく懇親会が開かれています。常に登録会員数 30 人を下らず、2005 年から 2006 年にかけては最多数の 38 名を数えるまでになったものの、以降、帰任・転任が相次ぎ、昨 2008 年、偶々七夕の夕刻に開催された同窓会時には 22 名になってしまいました。時あたかも、江戸末期に締結された日仏修好通商条約 150 周年を記念してパリは日本の文化財展示や伝統芸能上演、日仏経済交流行事等に賑わって日仏関係は好調、また、帰任・転任された同窓生の各界ポストも維持されていて、在仏同窓生の激減は偶然に過ぎません。因みに、2001 年以來離仏された方は 54 名にのぼります。

この 2008 年七夕、1900 年万国博覧会に南仏から集客のためパリ・リヨン駅舎が改築された折に建設されたベルエポック様式の華麗な遺構ル・トゥラン・ブルーでの夕食会が直近の同窓会です。故田島先生をお迎えして以来久々に、定年ご退官後パリ大学国際シテ日本館館長に就任された西永良成教授、在仏日本大使館公使に向向された渡邊啓貴教授 (F 昭 56)、二先生のご臨席を得、出席率の跳ね上がる盛会となりました。

同窓会開催で特筆したいのは、2007 年 12 月 1 日、同窓生仲間では通称シャトー・サカグチ、公称シャトー・デ・クロ、オーナー坂口功一氏 (F 昭 44) 経営のシャトーホテル落成を祝って開かれた会です。

シャトー・デ・クロは、パリの南東、近郊高速メトロ終着駅の彼方、シュヴルーズ溪谷に広がる森林田園地帯の町、パリからほぼ 50 km のボンネルにあります。この地域はパリ、ヴェルサイユ、ランブイエに近い地理的条件から中世・近世に王家縁の大貴族の領地となって町村が発展し、19 世紀以降はパリの富裕ブルジョアジーも邸宅を建設するようになりました。

荘園デ・クロの名は 17 世紀半ばから土地登記

簿に記載が見られ、1660 年にはルイ 14 世の財務大臣コルベールの義兄が購入、その後名貴族二家の領有を経て 19 世紀前葉法服貴族ド・トレムモン所有となり、初めて城館が建立されます。シャトー・デ・クロの誕生です。ド・トレムモン家時代は中央棟のみ、両翼棟が増築されて城館が現在の姿になるのは 20 世紀に入ってから、ヨーロッパ製鉄業の先駆者テオドール・ローランが城館の主となって後 1929 年です。

ローラン家が売りに出していた外壁内部共かなり荒れた姿のシャトー・デ・クロを 2002 年、自身も居住するシャトーでシャトーホテルを運営する企画をいただいていた坂口さんが購入。購入後は、建築士を介在させずにご自身で修復改装の図面を引き、資材を選び、ご夫人とご長男と共に各施工業者を陣頭指揮、インテリアもすべて坂口夫人が調達され、そのため、城門から城館まで上下水道配管・電気配線を地中に埋めるためのツルハシの最初の一撃を坂口さんが土に打ち込んだ工事開始から竣工まで 5 年余もの歳月がかかった、と伺いました。2007 年に落成した瀟洒なシャトーホテルは花園と広大な森林 5 ヘクタールに囲まれ、結婚披露、慶祝行事、企業セミナー等開催用サロンに併せて宿泊施設を擁しています。

落成祝賀同窓会では一同、坂口さんの壮挙に杯を挙げました。坂口さんはワイン輸出、とりわけブルゴーニュ貴酒の醸造蔵を日本に向けて開くことに成功された方でもあります。供されたブルゴーニュは正に美酒でした。百聞は一見に如かず。 <http://www.chateaudesclos.com/> 緑濃い林間に白亜の城館が出現します。



2008 年七夕の夕食会